

1 【出題の意図と対策】

文学的文章（小説）の読解で、ここでは、今野敏の『天を測る』が題材です。アメリカへ向かう威臨丸の中で、日本側とアメリカ側の測量結果について意見が対立する場面です。船の現在位置を、太陽などの天体と水平線の間の角度を測ることで割り出しているのですが、その数値に差異があったことが今回の騒動の原因です。小説を読むときには、登場人物の人物像や心情の変化を捉えます。ここでは、友五郎とブルックの心情を中心に、その周囲の人物の心情も丁寧に読み取り、解答していきましょう。

【解答】

- ① a そうほう
- ② e ほこり

③ おりがみ

④ 例 自分の過ちをあっさり認めたブルックに拍子抜けする気持ち。（28字）

⑤ X 尊敬の念

Y 例 海軍の経験と計算結果は関係ないとして計算のし直し（24字）

⑥ ウ

【解説】

② ポイント《人物の心情を正しく理解できるかどうか》

ブルックは、海軍での長い経験から自分の測量に自信を持っています。それは、友五郎に、「私の測量に間違いはありません」ときつぱりと言っていることからうかがえます。しかし、友五郎が引き下がろうとはしないので、計算し直しても、自分たちの計算に間違いはなく、結果は同じだが、そこまで言うなら計算し直してやってもいいと思っっているのです。

③ ポイント《ことわざの知識があるかどうか》

「おりがみ付き」は、かつて美術工芸品を確かなものとして保証する鑑定書を「おりがみ」と言ったことに由来することわざです。

④ ポイント《文章の内容を正しくまとめられるかどうか》

遅れてやってきたブルックは「こちらの誤算でした」と自分たちのミスをあっさり認めます。友五郎は「彼らには海軍士官としての誇りがあるから、おいそれと自分の過ちを認めないのではないかと思っていた」ため、やや拍子抜けした思いでいます。何に対して、友五郎がどう思ったかをまとめましょう。ブルックが自分の過ちをあっさり認めたことに対する「拍子抜け」「驚き」「意外に思う」心情が書かれていれば正解です。

⑤ ポイント《人物像を正しくまとめられるかどうか》

「あなたの自信と信念」とありますが、ここでの「自信」とは、日本側の「測量（計算）は合っている」という自信です。また、「信念」とは、「尊敬の念」を抱くような相手に対して、自分が正しいと思うことは言うということです。ブルックは自分が経験豊富なことを友五郎に伝えましたが、友五郎はひるむことなく「計算は海軍の経験とは関係ない」と、計算のし直しを要求し続けます。その信念に、ブルックは感服したのです。

⑥ ポイント《文章の表現の特徴について理解できるかどうか》

アは、「感情的に主張する友五郎」「一触即発の様子」が誤りです。ブルックや友五郎は冷静に話しています。イは、まず「士官の俗っぽい英語が聞き取れず」が誤りです。万次郎は、聞き取れたために「一瞬躊躇した」のです。また「ブルックの反応を待つ万次郎の計算高さ」も誤りです。そういった記述はありません。ウは、「伴たち三人が心配そうに話してきた」「船室の出入り口から友五郎の様子を見つめている」、計算が合っているとわかって「ほっとした」様子から、自信のなかった様子が読み取れるので合っています。エは、「自分たちの間違いをなかったことにする」が誤りです。ブルックは、自分たちの間違いを認めています。

2

【出題の意図と対策】

説明的文章（説明文）の読解です。ここでは、宇宙物理学者である池内了の『科学と社会（望むこと）』を題材にしています。本文は「言葉」をテーマに、日本の現状、言葉を学ぶことの重要性が述べられています。説明文を読むときには、その文章が何について書かれているかを理解し、そこから筆者がどういう結論や考え方を導き出しているかを読み取っていきましょう。

【解答】

- ① d 幼（い）
- ② e 構成

③ ア

④ 例 人類の言葉の拡大の歴史を年齢とともに追体験して言葉豊かにしている（33字）

⑤ X 色々なものをつないでいく機能

Y 自己と他者の関係

⑥ エ

【解説】

② ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》

この次の段落で筆者は、「非常に断片的な言葉が使われている時代」は、「旧来の言葉が破壊されていく時代ではないのか」と心配し、さらに、そのような時代にあって、「ほんの断片的な言葉のやりとりだけで、哲学は語れるのか、文学を多様に彩られるのか」と危惧しています。日本の「言葉の豊かさ」や「色んな表現の仕方」が失われることを恐れていることが読み取れます。

③ ポイント《文法の知識があるかどうか》

「国なのに」の「な」と、ア「雨なのに」の「な」はともに断定の助動詞「だ」の連体形です。断定の助動詞の「な」は「のに」「ので」「の」に連なる場合にだけ用いられます。イは助動詞「そうだ」の連体形の一部、ウは連体詞「おかしな」の一部、エは形容動詞「新鮮だ」の連体形「新鮮な」の一部です。

④ ポイント《文章の内容を正しくまとめられるかどうか》

指定語句の「年齢」「豊か」、次の文に書かれた「二十万年」に注意しながら本文を読み進めると、「人間は二十万年という時間をかけて言葉を豊かにしてきました」「二十万年の言葉の拡大の歴史を、私たちは……追体験して言葉を豊かにしている」「年齢とともに二十万年の人類の言葉の歴史を追体験していく」とあるのが見つかります。「二十万年の」人類の言葉の拡大の歴史」を「年齢とともに追体験して」「言葉を豊かにしている」の三点をおさえて、字数内で解答をまとめましょう。

⑤ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》

筆者の主張を探すと、最後から二つ目の段落に「それを自己と他者の関係……によって深めていくということこそが、生きる力ではないか」とあるのが見つかります。ここから、Yには「自己と他者の関係」があてはまります。また、「言葉の意味付け」という言葉に着目すると、最終段落に「言葉の持っている意味付けや、（言葉には）色々なものをつないでいく機能があるのだ」とあるのが見つかります。ここから、Xには「色々なものをつないでいく機能」があてはまります。筆者は、知識を得るにも、得た知識を結び付けるにも言葉が必要で、言葉のつなぐ機能を使って「自己と他者の関係」の中で深めていくことが「生きる力」になる。だから「言葉のより深い把握が不可欠」だと述べています。

⑥ ポイント《筆者の主張を正しく理解できるかどうか》

第五段落に「それを通じて、今度は自分で感情とか論理、あるいは概念といったものを表現する術を獲得する」段階だとあります。「それ」は「色々な学問の関連」性の理解と重要性の理解を指します。また、直後に「ここで、国語が全科目の架け橋となる……表現し……技量の基礎になる」と書かれています。したがって、エが正解です。

3 【出題の意図と対策】

『万葉集』に収められている和歌についての解説文の読解問題です。ここでは、日本文学研究者、中西進（なにしずむ）の文章が題材になっています。和歌二首が採り上げられています。万葉人のような思いが込められている歌なのかを理解し、そこに流れている万葉的な世界観を読み取っていきましょう。『万葉集』の和歌は、現代短歌とはことばも異なり、難解なものに感じられるかもしれませんが、解説文をしっかり読んで設問に答えましょう。

【解答】

- ① エ
- ② (1) ウ
- (2) イ
- ③ X 例 雁の声を聞いたから咲いた（12字）
Y ちっぼけな

【解説】

- ① ポイント 《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
空欄の直前にある「つまり」に着目します。「つまり」は、直前の内容をその後でまとめる場合に用いる接続詞です。前の内容を見ると、「夫を送った妻の歌です」「そのとまりの空に夜霧が立つでしょう」とあります。「とまり」とは、ここでは夫が乗っている船が泊まっている港のことです。アとウは、「嘆きの息」をついているのは「妻」なので、「夫が嘆くが誤りです。イは、「留守宅の夜霧になる」が誤り。夜霧が立っているのは夫がいる港です。妻の嘆きが港の夜霧になる、としたエが正解です。
- ② (1) ポイント 《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
「万葉的な世界観」（筆者は、「宇宙生命観」とも言っています）とは、雁（かり）の声を聞くと萩の花が咲く、「おまえがいるから雨になった」など、一見無関係に見えるものが結びつけられた表現のことです。それは、「修辞」、「レトリック」、「いいかげんな表現上の技巧」と受け取られがちですが、「当然あり得る」「非常に自然科学的なこと」だというのが筆者の主張です。したがって正解はウです。アは、「自然科学の視点でみるとありえないことが多い」の部分が誤りです。イとエは、「修辞には違いない」「不可解ではある」とした点が誤りです。
- (2) ポイント 《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
(1)をふまえて考えます。選択肢の中で、一見無関係な現象を結びつけていないのは、イです。「立山（たてやま）から流れてくる水は、常に雪消水（ゆきけみず）をたたえて流れ続けている」のは、事実を述べているだけなので、合っていません。
- ③ ポイント 《文章の内容を正しくまとめられるかどうか》
X は、一つ目の和歌のあと、二段落目を見ると「萩の花はなぜ咲いたか。雁の声を聞いたからだ」とあります。ここを利用して、「萩の花は、雁の声を聞いたから咲いた」などとまとめましょう。また、Y は、直前に「句作によって」とあることから、「俳句づくり」について述べられている、「ターミナルケアの中で」から始まる段落に着目します。そうすると、「俳句をつくることで、ちっぼけなひとつの個人の命にすぎないものが宇宙化するのです」とあるのが見つかります。

4 【出題の意図と対策】

近年「読む」能力とともに、「話す・聞く・書く」能力の育成に力が入れられています。入試においては、「書く」能力を判定する記述式の問題とともに、スピーチ・発表・話し合いなど、「話す・聞く」能力を判定する会話形式の問題も頻繁に出題されています。話し合いと資料の融合問題では、話し合いのテーマや、話し合いで主張されている意見とともに、問題で用いられている資料のどこに着目して発言しているのか、資料とのつながりを正確に読み取ることが大切です。

【解答】

- ① ウ
- ② エ
- ③ ウ・エ・オ（完答）
- ④ Y 例 賞味期限切れなどの理由で売れ残ったものが食品ロスになる。賞味期限の近い手前のもをかう、季節商品は予約販売を利用するなど、消費者の意識的な行動も必要だ。（76字）

【解説】

- ① ポイント 《漢字の意味を理解できるかどうか》
「過剰」の「過」とウ「過信」の「過」は、共に「度がすぎる」はなはだしい」という意味です。ア「通過」の「過」は「とおりすぎる」、イ「過去」の「過」は「時がすぎる」、エ「過失」の「過」は「あやまち」という意味です。
- ② ポイント 《資料を論理的に読み取ることができかどうか》
「由香さんの意見が論理的なものとなるために」という設問文の条件に注意しましょう。由香さんは、【資料Ⅰ】から読み取ったことをもとに、「各家庭の食品ロスへの取り組みはまだ改善の余地がありそうだね。」という考えを述べているので、その考えの根拠となる内容を探します。アは、「賞味期限を気にしない」ではなく「気にする」傾向が高まっています。イは、「低下している」ではなく「高まっている」の誤りです。ウは、増え幅は「過剰除去」が9ポイント、「賞味期限」はマイナス7ポイントですから、増え幅が大きいのは「過剰除去に注意する人」です。エは、資料の読み取りとしても正しく、各家庭の食品ロスへの取り組みには改善の余地がある、という由香さんの意見の根拠としても適当です。したがって、エが正解です。
- ③ ポイント 《発言の特徴を理解できるかどうか》
アは、康平さんは「発言に対する疑問点を示」していないので誤りです。イは、由香さんは一回目の発言で「何が読み取れるか」を自分で説明しています。「ほかの三人に尋ね」てはいないので誤りです。ウは、真紀さんの二・四回目の発言内容に合っています。エは、伸一さんは二回目の発言で資料内容についての詳しい説明を行い、三回目の発言では実例を挙げながら説明しているのに合っています。オは、由香さんの最後の発言が伸一さんの「説明書きを入れる」理由を補足説明しており、真紀さんの話し合い全体をまとめる発言、康平さんの結論へ向けた提案につながっているのに合っています。
- ④ ポイント 《資料を適切に利用して、論理的な文章が書けるかどうか》
【資料Ⅰ】【資料Ⅱ】や話し合いの内容を活用しましょう。たとえば【資料Ⅰ】からは、家庭での食品ロスの原因は食材の過剰除去部分や食べ残しだと考えられることがわかります。二文目の対策は事業者が行うべきことではなく、「私たちにできること」である点に注意しましょう。アはドギーバッグを利用する、少なめを頼む、イは賞味期限切れのものも食べられるかどうかを自分で判断する、エは傷のあるりんごなどの規格外品を積極的に買う、オは学校給食の食品ロス量を公表してもらい、どれくらいのお食べ残しがあるのかを生徒に実感させる、などが考えられます。